『僕何だかきまりが惡くつて、さう言へなかつたのです。』

「それ御らん。『はい。』も言ひにくい言葉では無いか。」

太郎はつくづくと自分の惡かつた事を後悔すると共に「はい。」と「いゝえ。」の言ひにくいわけをさとることが出來た。

悔

亡

第十八　文天祥

支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、勢日々に盛にして、宋の領地をかしかば、宋は次第におとろへて、ほとんど亡びんとするに至れり。

羊

虎

敗

兄

以

宋の臣文天祥大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。其の友之を止めていはく、「羊の虎に向ふが如し。危し。」と。天祥きかずしていはく、「我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。」と。出でて元軍に當る。

然るに元軍の勢いよ〳〵盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。こゝにおいて皇兄位をつぐ。文天祥命を奉じ、各地に轉戰して元軍を破る。されど宋軍の大勢日々に非にして、天祥の誠忠を以てしても如何ともすることあたはず。

捕降

たまく元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

時に宋の勇將張世傑よく戰ひて元軍を防ぐ。敵將張弘範如何にもして之を降らしめんとし、文天祥に命じていはく「書をしたゝめて張世傑を招け」と。天祥固くこばみていはく「我、國を救ふことあたはず、いづくんぞ人をいざなひてそむかしめんや」と。張世傑等の奮戰も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、張弘範、文天祥に説きていはく「宋亡びぬ。御身の忠義を盡くすべき所なし。今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん」と。天祥きかず。或人又なじりていはく「汝大勢の如何ともすべからざるを知つて、何ぞいたづらに苦しむことの甚だしきや」と。天祥いはく「父母の病あつければ、醫藥の効なきを知りても、尚治療につとむるは人情の常にあらずや。心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ」と。遂に獄に投ぜらる。

富病効治

元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。天祥いはく「我は宋の臣なり。

從

いづくんぞ二朝に仕へんや。願はくは我に死をたまへ」と。帝其の志の動かすべからざるを知り、之を刑場に送らしむ。天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としていはく、「臣が事終る」と。うやゝしく南宋の方を拜して死す。

元帝歎じていはく、「文天祥は眞の男子なり」と。

第十九　温室の中

寒い北風に吹かれながら、冬枯の小道を通つて來て、一足温室の中にはいると、全く別の世界に來たやうな心持がする。とりぐの花の色、むせ返るや

香

うな強い香、ぼうつと身に感じる暖さ、ガラス屋根を通して來るやはらかい日の光、まるで春の國に居るやうだ。先に立つたにいさんが、

「あゝ、咲いてゐる、く。みよ子、ずゐぶん珍しい花があるだらう。此處は主に蘭の類を集めてある處だ。熱帶地方から持つて來たのだから、かうして年中六七十度以上の暖さの處に置かなければいけないのだ。」

と、いろく説明して下さる。たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、たれ下つた莖に、幾つも咲い